

2017年11月27日（月）～書き始め 文：岡本 悠

2017年12月 1日（金）～発表 文：岡本 悠

題：蝶野2000！！（ちょうのトゥーサウザンド！！）

副題：蝶野正洋のユニット、＜TEAM2000＞とは何だったのか！？

目次

- 1、書き始め、発表。題、副題。目次。
- 2、はじめに
- 3、蝶野正洋の、主なタイトル。TEAM2000のメンバー。
- 4、TEAM-2000結成。フライ等加入。武藤派NWO-JAPANとの抗争。
- 5、蝶野対大仁田、ノーロープ電流爆破デスマッチ！！
- 6、蝶野対武藤、決着戦。TEAM-2000拡大。
- 7、渕正信の挨拶。蝶野対渕。
- 8、TEAM-2000対新日本本隊やCLUB G-EGGS。軍団更に拡大。
- 9、武藤が帰国。TEAM-2000対BATT。蝶野対武藤の三冠王座戦。
- 10、TEAM-2000が更に全日本等の外国人部隊と提携。武藤等、全日本移籍。
- 11、冬の札幌2月革命
- 12、チーズバーガー（おまけ）
- 13、おわりに

はじめに

「目標と定めたものにぶつかって自分を試してみたいという気持ちを失った事はない（「生涯現役という生き方」共著：武藤敬司&蝶野正洋の（蝶野の言葉））」

という文章があったが、私は、自分の事を、本やエッセイや文章にした事はあるが、（コラム等は除く）。自分以外の人、今回はプロレスラーの蝶野を本にしようと考えた時、100ページや200ページを平気で書く事等無理だと思った。

10ページを目標にしようと考えた。それだって立派な本（本というよりHP上のエッセイだが）だから、やって得るものは絶対に生まれるはずだと思った。

そして、作業に入る段階で、蝶野の何をどういう風に書けばいいのか？という難題にぶちあたった。ただ、題名だけは、

題：蝶野2000！！（ちょうのトゥーサウザンド！！）

副題：蝶野正洋のユニット、＜TEAM2000＞とは何だったのか！？

という考えはあったので、蝶野を追いかけていた頃の、ユニットTEAM2000だけに絞って書こうと考えた。

使っている道具も、著者：蝶野の3冊の本と、インターネットの百科事典ウィキペディアと、ユーチューブだけにしようと思った。蝶野を本気で全部書いたら、『蝶野正洋25周年記念DVD』が必要だと思ったのだが、ここでは値段は控えるが、私からすると値段が高かった事と、その高いDVDを買って見た上で、「本当に本を1冊書くだらうか？」というのも怪しかった。書けなかったら大損だ。だから、今回は「蝶野の3冊の本とウィキペディアとユーチューブは使って良くて、そして10枚書く。」という事を目標にする事にした。

この作業をやる上で、冒頭の（蝶野の言葉）が、まさに励みになり当てはまるから、引用させていただいた。

現段階でも、プロレスのノートには、「蝶野正洋」と書いて、2ページ位しか書くアイデアがない状態だ。これで、本当に10枚を書けるのか？そして今回は、何を書いてもいいわけではなくて、1999年～2002年の3～4年で消滅した、あのユニットTEAM2000だけを搾りに搾って書こうとしているから難しい。

確かにもっと気軽に「蝶野本人の事」「蝶野の別のユニット」を書けば楽かもしれないが、その辺はまだ初体験の、人の事を書く本という事で、実験しながら書いていきたいと思っている。

ウィキペディアは時系列で書いてあるとか、データの倉庫であるが、正直に言えば丸写しの様な事はしたくないが、どうしても蝶野やTEAM2000を語る上で、ちゃんとしたデータを必要とした場合は使わせてもらおうと思う。ユーチューブも。

この作品ができれば、私の中でかなり進歩する。もしかしたら、蝶野について、丸ごと書けるような作品がいつか書けるかもしれない。今回は数ページを楽しんでください。（始）

蝶野正洋の、主なタイトル。TEAM2000のメンバー。

まず、ウィキペディアから引用させてもらうが、蝶野の主なタイトルの経歴。

- ・G1 CLIMAX 5回優勝。
- ・IWGP ヘビー級王座 1回獲得。
- ・NWA 王座 1回獲得。
- ・IWGP タッグ王座 7回獲得。(パートナーは、武藤敬司と2回。天山広吉と5回。)

他にも、王座ベルトを獲得しているが、有名なところでいうとこの辺りになる。

こちらも、ウィキペディアから引用。<TEAM2000>のメンバー。

首領(ドン): 蝶野正洋、AKIRA、ドン・フライ、スーパーJ、天山広吉、小島聡、スコット・ノートン、ヒロ斎藤、後藤達俊、小原道由、邪道、外道、GOKU-DO、スコット・ホール、金本浩二、ブラック・タイガー、エディー・ゲレロ、ジャイアント・シルバ、ジャイアント・シン。

提携メンバー

大仁田厚、スティーブ・ウィリアムス、マイク・ロトンド(マイケル・ウォールストリート)、ジム・スティール、マイク・バートン、リック・スタイナー、スコット・スタイナー、チーズバーガー。

業界外

草薙剛、ユースケ・サンタマリア、鈴木尚典、三浦大輔、中山雅史、岡野雅行、武蔵丸光洋、千代大海龍二、SEX MACHINEGUNS

TEAM-2000 結成。フライ等加入。武藤派 NWO-JAPAN との抗争。

まず、私が、テレビでプロレスを見始めたのが、新日本プロレスの1999年1月4日の東京ドーム大会。佐々木健介対大仁田厚が行われた試合で、大仁田がGパンのポケットから、火炎（かえん）を健介の目に浴びせて反則負けになった試合だ。（私が17歳の頃で、今、私は35歳。）

健介は強く、IWGPヘビー級選手権挑戦者トーナメントで優勝を果たした。そして、観戦していた王者の武藤を呼び込んだ。王者・武藤と、挑戦者・健介が睨み合った。

次の興行で、王者・武藤は「腕ひしぎ逆十字固め」で健介を退けた。

蝶野は、首の怪我からの復帰戦で、ハンディキャップマッチとして、蝶野対武藤&ヒロ斉藤という試合を行った。すると試合中に野上彰（AKIRA）が乱入して、蝶野を援護する形となった。この試合により蝶野とAKIRAが手を組んだ事になった。

蝶野と同期で、網膜剥離で目に問題を抱えていたが復帰したAKIRAが合体してTEAM 2000というユニットが作り始められた。IWGPヘビー級選手権で、武藤がフライに勝利した後、蝶野達がフライを勧誘した。フライもそれを受け入れた。

これで、TEAM 2000のメンバーは、蝶野、AKIRA、フライ、その後、スーパーJ（元NWO スティングを名乗った）も加わった。その後、全日本プロレスではマイク・ロトンドを名乗り、新日本プロレスでは、マイケル・ウォールストリートという名で活躍した外国人レスラーも加わる。

武藤も軍団を組んでいた。NWO-JAPANである。元々は蝶野がアメリカWCWから輸入してきて総帥（そうすい）だったが、蝶野の首の怪我により、武藤が必然的にBOSS（ボス）になった。

当時の主な、武藤派のNWO-JAPANのメンバーは、武藤、天山、小島、ノートン、ヒロ斉藤・・・等である。ただ、武藤のNWO-JAPANにも亀裂が入りかけていた。

この頃から、蝶野派のTEAM-2000と、武藤派のNWO-JAPANが、抗争を始める。新日本、土曜深夜の1時間枠があった時代。「ワールドプロレスリング」で毎回、番組内の最後の試合で、この2軍団の対決が見られた。

蝶野は、徐々にこの時期からNWO-JAPANの天山と小島等を軍団に入れるようにして、試合終了後に、握手を求めてTEAM-2000への勧誘を求めた。しかし、握手はしても天山と小島は、すぐに蝶野に攻撃を与え、TEAM-2000へは入ろうとしなかった。

武藤、天山、小島組のタッグマッチなどでは、3人によるコンビネーションの攻撃を見せる等、息もあっているように思えた。

この1999年という年は、次ページの蝶野対大仁田を含め、TEAM-2000対NWO-JAPANの軍団抗争の時代だったと言える。

この年、蝶野は大仁田と、武藤は化身グレート・ムタとして、大仁田の化身グレート・ニタと戦った年と重なる。その蝶野と武藤が軍団の存亡を懸けてシングルマッチで激突する。

蝶野対大仁田、ノーロープ電流爆破デスマッチ！！

大仁田は、長州力との一騎打ちをする為に追いかけていた。しかし、長州は挑発には乗ってこない。

そこで、大仁田はターゲットを蝶野に変えた。大仁田は新日本のある興行で、蝶野の試合前に突然リングに上がると、「蝶野君、電流爆破に上がる事がそんなに怖いのか！」と挑発した。あとから入場してきた蝶野は、何故か大仁田の襲撃を受ける恰好になった。実況の辻義就（現、よしなり）アナが「蝶野は甘んじて受けていませんか？」と言っていた。大仁田は、しばらく何も抵抗しない蝶野への攻撃を終えると挑戦状を置いてリングを降りた。すると、リング上で蝶野がマイクを持ち「俺は素人（大仁田の事の意味）には手を出さないんだ！」と言い、「でも先に手を出されたら関係ねえ！」と言って、リング下の通路を降りていった大仁田を追いかけて乱闘状態になった。

そして、1999年4月10日。蝶野対大仁田の第0試合。ノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチが行われた。私はこの試合を生で観戦している。その後も何回かビデオなどで、この試合を見ているが、この試合は面白い。まず、蝶野は入場すると尖った有刺鉄線を神妙な顔で見つめていた。蝶野のコスチュームの上半身は、硬そうで分厚い服だ。両腕はファンへのプライドもあっただろう、剥き出しの肌のまま何もつけていなかった。

試合が開始して、蝶野がイスを電流爆破の有刺鉄線に投げるという行動に出た。すると「バアーン！！」と音がして、白い煙が立った。

その後、お互いに電流爆破に突っ込んで倒れ、大仁田はやはり電流爆破は慣れているのか（蝶野はその後、『大仁田はこういう戦いはスペシャリスト』という様な言葉を残している。）大仁田は、自ら甘んじて、明らかに背中から突っ込んだだろう、というシーンもあった。

最後は2人でもつれるようにして、まともに電流爆破に突っ込むとレフェリーから、ダウンカウントが数えられた。蝶野は完全にグロッキーで起き上がれない。しかし、大仁田はぎりぎりカウント9で立ち上がったように見えたが「バタッ！」と倒れ、「両者ノックアウトの引き分け」に終わった。

すると、蝶野が意外な行動に出る。なんと「邪道」と書かれたジャンパーを大仁田の背中にかけてあげたのだ。それだけを済ますと、蝶野はファンを煽り、花道を逆に歩いてバックステージへと戻っていった。

テレビで見ると、蝶野はもう元気で、「無傷だよ！」と語り、この試合は幕を閉じた。蝶野にとっても、大仁田にとっても、武藤や長州は共通の敵という事が、蝶野が大仁田をTEAM 2000と共闘していこうというメッセージだったようだ。一匹狼の大仁田にとっては行動しやすく嬉しい出来事だったに違いない。こうして大仁田と提携した。

ただ、当時は、フライ等は、大仁田の軍団加入を嫌がっていると言われていた。フライも大仁田を毛嫌いする位なら、ある意味、プロレスに詳しいという風にも取れる。

蝶野対武藤、決着戦。TEAM-2000拡大。

2000年1月4日東京ドーム。「ブラック・サミット」と銘打たれた、黒の軍団抗争、TEAM-2000の首領、蝶野対、NWO-JAPANのBOSS、武藤が激突した。

東京ドームの会場には、蝶野正洋への応援として、ハウンドドッグの大友康平さんが解説席に座り、ブラザー・コーンさんの煽りマイクで、煽りVTRで各著名人達が、人差し指と中指を重ねて出すTEAM-2000ポーズでビジョンに登場して盛り上げた。

試合はやはり、物凄い深みのあるプロレスになったが、最後は、蝶野が武藤を「クロス式STF」で破り、2つのブラック（黒）はTEAM-2000ひとつになるはずだった。

NWOという権利も当時のWCWなのか、海外の組織が持っていた為、どちらにせよNWO-JAPANというユニット名は外すしかなかった。

というわけで敗れて一匹狼になった武藤は、この2000年から、会社が傾いていたWCWを半年間あまり主戦場にした。

蝶野にすぐに吸収されると思われたNWO-JAPANは、天山と小島等が「武藤が抜けただけだ。」という感じで、まだ、TEAM-2000と抗争していくように見られたが、TEAM-2000の蝶野と、NWO-JAPANのヒロ斉藤の密会が、ある日の「ワールドプロレスリング」の放送の最後に放送された。次の週になると、突然、新メンバーが1人ずつ、「TEAM-2000！！」と指のポーズを作って登場して、軍団入りが決まっていた。新たに、天山、小島、ノートン、ヒロ斉藤、そして、何故か、後藤達俊と小原道由も加わり、これで少なくともメンバーは10人に膨れあがった。

蝶野個人としても、率いるTEAM-2000としても、プロレスのリング以外の業界に進出していく。例えば、「夜もヒッパレ」と言う歌番組に、TEAM-2000が登場すると、センターの蝶野は何も歌わず、天山や小島・・・等が歌っている。そして、「カモン！」とか英語の部分、つまりかっこいい部分だけを歌って、後はメンバーに任せるというスタンスは見ていて蝶野らしいかっこ良さで面白かった。

蝶野は単独でも活動した。今でこそあらゆるバラエティー番組等にも出ているが、「とんねるずの生でダラダラいかせて！！」では、スペインの闘牛で、蝶野の人生初の異種格闘技戦（といっても相手は牛）。上手い足のステップで赤い布に突進してくる大型の牛を交わすと、最後は、その牛もビックリする位の表情をしているように見えたが、蝶野が後ろから2本の角を掴んで覆い被さり動けなくした事だ。

更に、意外という言い方もできるかもしれないが、TEAM-2000の蝶野、天山、小島、ヒロ斉藤はこの「とんねるずの生でダラダラいかせて！！」の最終回に登場している。パチンコ大会でかなり当てたようだ。私が記憶にある方の、TEAM-2000のパチンコ大会では、蝶野のTEAM-2000ポーズに対抗して石橋貴明が「チームいっぷく」とやり、加藤茶がチーム・茶と言って「かとちゃん、ぺ」のポーズをやり、木梨憲武は何をやっていたか忘れてしまったが、とにかくTEAM-2000ポーズでアレンジしていたのだ。

渕正信の挨拶。蝶野対渕。

2000年、蝶野率いる TEAM-2000 は、リングでは新日本隊との対決を開始したと思われる。

蝶野は2000年7月30日の、横浜アリーナ、長州力対大仁田厚のノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチの解説を務めたりしていた。ちなみに、この試合も私は観戦しに行った。

その頃、全日本プロレスは大変な時期を迎える。故、三沢光晴を中心とする多くのレスラーが全日本を退団して、7月にプロレスリング・ノアを旗揚げしたのだ。

全日本に残ったレスラーは、川田利明、渕正信、太陽ケア、馳浩だけとなってしまった。

すると、2000年8月のG1クライマックスが行われていた、新日本のリングに単身、渕が登場。マイクを持つと、「ずっと長い間、築かれていた、新日本と全日本の壁を壊しに来ました！」と発言。すると、長州が優しい笑顔で渕のいるリングに近づき、長州は「やっていきましょう！」という態度を取るが、しばらくすると、蝶野が登場し、渕と長州に「ふざけるな！」と突っかかっていた。蝶野は、被っていた帽子を渕に投げつけるが、最後この2人が別れる時に渕は「蝶野！忘れものだ！」と帽子を投げ返すシーンは、あまりに有名である。こうして、新日本対全日本の開戦は、蝶野対渕という形で決まった。ただ、全日本の客入りも考慮してか、全日本のマットで一騎打ちが行われる事になった。

2000年9月2日の、全日本、日本武道館大会の第6試合で蝶野対渕の試合が行われた。私はこの試合も観にいつている。

蝶野は入場すると、早くもヒールぶりを発揮する。あの、故ジャイアント馬場さんが作り上げた全日本マットのエプロンに立つと、リングの中央に唾（ツバ）を吐いた。

私は、その時も、根っからの蝶野ファンだったので、渕ってどれくらい強いのだろう。と少し心配になった。全日本の四天王（三沢、川田、小橋建太、田上明）や、5番目の男、(秋山準) は知っていたが、渕のデータは全くわからない。ただ、後から調べてみると、ジュニアでは世界ジュニアの初代王者で、もの凄い防衛数を重ねているレスラーであるという事だけは知った。

試合は記憶の中で辿るしかない。渕も当然レスリングは巧いのだろうが、蝶野はレベルが違っても、互角の様な戦いに見せるのが巧いレスラーでもある。渕もけっこう攻撃をしている様にも見えた。お互いに“STF”という技を使う攻防は良かったが、蝶野の“STF”に渕も根性があるのかギブアップをしない。すると、蝶野は最後、渕に“ケンカキック”を連発する。なんとか、返した渕だったが、最後の1発で完全にフォールされてしまった。蝶野が勝利である。

私は、この試合は本当に良い試合だったと思う。蝶野は、蝶野よりやや弱いレスラーと戦う時の方が良い試合に見える時が多い。

こうして、この開戦から、永田裕志と川田がタッグで戦うとか、武藤がやがて、全日本に移籍してしまうという門戸が開くという事に繋がったといっても過言ではない。

TEAM-2000 对新日本本隊や CLUB G-EGGS。軍団更に拡大。

2000年～2001年の TEAM2000 は、とにかく団体抗争に入っていた。有名な所では、TEAM2000 对新日本本隊の、10人対10人、全シングルマッチが行われた。

TEAM2000 が5勝4敗で迎えた大将戦は、蝶野対健介である。健介はこの時も IWGP ヘビー級王者。1試合前で故、橋本真也にスコット・ノートンが破れた事により、怒っていたノートンがエプロンに立っていた健介の足にリアットを放ち、健介は足を痛める。しかし、負けられない健介は蝶野を「ストラングルホールドγ (ガンマー)」で破り、5勝5敗になった。ここで、延長決着戦が行われるのだが、新日本本隊からは健介が出てきて、TEAM2000 もフライ等が出たがっていたが、負けのまま終われないと蝶野が出てきた。試合は、蝶野が“クロス式 STF”をリング中央で決めるが、健介はギブアップを決してしない男で有名だった。もうずっと技をかけられていたので、橋本は健介がギブアップはしないと見て、タオルを投げ込んだ。蝶野が TKO で健介を破り、TEAM2000 が勝利した。

その後は、長州が名付けた、CLUB G-EGGS という、2000年～2001年までの、永田、中西学、吉江豊、故、福田雅一、ブライアン・ジョンストン。というユニットが登場して、TEAM-2000 との抗争を繰り広げる。ただ、永田は特に IWGP ヘビー級戦線のシングルでは強かったが、軍団抗争では、TEAM-2000 の蝶野には適わなかった。何より軍団に所属する人数の違いがありすぎて、CLUB G-EGGS は圧倒された。蝶野が発案したのか、軍団抗争の勝敗で勝ちが多い方が、次の興行を自分達の好きな様なマッチメイク等、全てを決めてもいいという話題が出ると、勝ち星は TEAM-2000 は二桁勝って、CLUB G-EGGS は1桁だった。

これで TEAM-2000 主催の興行が行われて、CLUB G-EGGS は前座試合。という扱いもあった。

TEAM-2000 は更に、メンバーを増やしていく。ジュニア部門まで拡大する為に、邪道、外道、GOKU-DO、金本、ブラック・タイガー、故エディー・ゲレロ等が軍団に加入する。

ヘビー級では、ホールや、シルバ、シンも軍団に加入した。

ホールは、G-1WORLD で、試合開始と共に、つまようじをフライに投げつけたら、パンチ一発で KO されてしまった。それから、武藤の三冠王座に挑戦する事にもなる。

シルバ、シンは巨大な2人で物凄く強かったが、お互いが試合中、仲間割れを起こし、蝶野達がシンの味方に入った事から、シルバが追放された。その後 PRIDE に進出した模様。

蝶野は、2001年の新日本の東京ドーム大会に登場。IWGP 王座争奪トーナメントが行われた。何故か VIP 扱いなのか、他のレスラー達は、1回戦から戦う中、蝶野は準決勝からの出場になった。

相手は1回戦を勝ち上がった健介。結果は「ストラングルホールドγ (ガンマー)」で、健介が勝利。健介はその勢いのまま、決勝で川田利明を破り、IWGP ヘビー級王者となる。

武藤が帰国。TEAM-2000対BATT。蝶野対武藤の三冠王座戦。

時代は錯誤しているが、2000年12月31日、大阪ドーム「INOKI-BOM-BAYE」で武藤がプロレスのリングに復帰。

2001年からは、新日本と契約したが、新日本ではもちろん試合をするが、全日本でも試合するようになる。

蝶野のTEAM-2000に対抗するユニット、BATTが出来た。まずは、武藤、そして大谷晋二郎（途中脱退）、馳、太陽ケア、新崎人生、そしてTEAM-2000を裏切ったフライ。といったメンバーである。

タッグマッチ等で、TEAM-2000とBATTの抗争が激化した。

蝶野と武藤も新日本プロレスのドーム大会で、武藤が帰国後シングルマッチを2回したが、1勝1敗となった。

ある日の『ワールドプロレスリング』の放送のオープニングで、蝶野がTEAM-2000のメンバーを全員呼び込んで、その時、全日本で三冠王者だった武藤に誰をぶつけるか？という公開場面があった。

蝶野は、シルバに近づくと「トリプルクラウン？」と言う。次にはジュニアの外道に近づくと、外道は「俺が、三冠を取ってやりますよ。」と言った。ややメンバーがざわつくと、蝶野は「うるせえ、コラッ！もう俺の中では決まっているんだ。」と言って、コーナーに1人関係なさそうに座っているホールに向かって、「スコット・ホール！」と言いつつ放った。

これで、2001年9月23日、三冠王座戦、(王者)武藤対(挑戦者)ホールの試合が決まった。

しかし、ホールは、武藤にいいように攻め込まれ、必殺技「アウトサイダーズ・エッジ(レイザーズ・エッジ)」も交わされ予想通り敗れた。私はホールが好きだし、このマッチメイクに問題はないが、絶対に勝つはずもない役目のホールを使うなら、当時の若い、天山や小島をぶつける方が良かったのでは、と今の私だと思ふ。やはり一流のホールはプロに徹してしまって、ファンとしては武藤対ホールのカードだけで満足と思ってしまうが、でもそれは悪い事ではないが、「闘い」が存在しない試合に感じてしまった。

そうなるも、もう首領(ドン)が行くしかない。2001年10月27日、三冠王座戦(王者)武藤対(挑戦者)蝶野の試合が決まった。

この試合は、全日本マットなのに、新日本所属のレスラーが1対1でメインイベントを行うという試合になった。事実上の決着戦であり、恐らく、2017年の今でも蝶野対武藤のシングルマッチはこれが最後だったと思われる。私はこの試合を観に行った。

最後の方で、武藤の“シャイニング・ウィザード”と、蝶野の“シャイニング・ケンカキック”の打ち合いになった。蝶野がサミング(目潰し)してから、“シャイニング・ケンカキック”を放つと武藤が倒れたが、最後は武藤が蝶野を“フランケンシュタイナー”で丸め込み勝利。蝶野はバックステージで「武藤への少しの思いやりだ！」と言いつつ放った。

TEAM-2000が更に全日本等の外国人部隊と提携。武藤等、全日本移籍。

2001年後半、武藤はこの頃全日本に、より参戦していくようになる。蝶野も全日本に上がる事が増えてきた。武藤を共通の標的にしたのかはわからないが、全日本の三冠王者となっている武藤に、故、ウィリアムスも、蝶野も防衛された。

ウィリアムスはいわば、全日本外国人部隊の首領（ドン）である。

そして、事は起こった。蝶野が確かロトンド辺りとタッグを組んで、川田等とタッグマッチを行っている時、スティールやバートンといった辺りの全日本外国人レスラーが現れた。場内、そして川田組も異様な光景に戸惑う。そして、次の瞬間、パッと花道の入場口にウィリアムスが登場する。全日本外国人勢は、ただ試合を見つめているし、ウィリアムスも入場口で腕を組んで立っている。そして、試合が終了して蝶野組が勝つと、全日本外国人勢が集まってきてポーズを決めた。

バックステージに行くと、蝶野がカメラに何かを喋っていたようだが、記者の「TEAM-2000と全日外国人の合体ですか？」の質問に対してウィリアムスは「まだ、今日は様子見だ。」と言うにとどめた。これが俗にいう、提携メンバーであり、TEAM-2000入りはしていない、という形になる。蝶野もウィリアムスには敬意を表したようだった。

ある新日本の試合を観ていたら、<スタイナー・ブラザーズ>リック&スコットの2人が蝶野&天山と戦っていた。試合後、蝶野がまた、<スタイナー・ブラザーズ>を自軍のTEAM-2000に入れる事に成功したようだ。

これでTEAM-2000は、途中脱退者を含め、18人の正式メンバーと、6人の提携メンバー、合計24名にも上った。

時は2002年を迎える。蝶野はどういう経緯かわからないが、この年の1月4日の東京ドーム大会で、蝶野&シン対天山&小島というTEAM-2000対決を行っている。

そして、新日本は1月に契約更改を行うが、武藤、小島、ケンドー・カシン・・・等が全日本へ移籍する事が決まったようだ。これにはアントニオ猪木も蝶野も・・・怒っていたようだが、蝶野としては「ひとつ俺に相談して欲しかった。」と語ると、武藤は「蝶野に言うと、絶対、反対されると思った。」と言っていたようだが、蝶野も当時は口も聞きたくない程頑なに拒んでいた雰囲気もあったが、やはりさすが大人なのか、最近では全く許している。

蝶野の本なので、あまり逸らしたくないが、武藤は猪木の総合格闘技路線に真っ向から反対していた事と、全日本の方が次第に温かい応援をもらえる居場所と感じたようだ。

しかし、その後、全日本の社長に就任すると、物凄い赤字経営で全日本外国人レスラー等にとんでもない金額を払っていたりして、説得して辞めてもらおう等大変だったようだ。

ただ、蝶野自身もその1か月後行動を起こす。このまま、猪木が総合格闘技路線を押し進めて、新日本が何をやっているリングなのかかわからない状態ではいけない。新日本はプロレスを見せる団体でなくてはならない。もうこうなったらしょうがない。猪木とリングで公開討論会を行おう。それが、「冬の札幌2月革命」である。

冬の札幌2月革命

テレビ『ワールドプロレスリング』で記者に囲まれた猪木が言う。「今日は何か蝶野が言いたい事があるらしいのでね。ちょうのうりよく」という、猪木がお得意のダジャレを言って登場してきた。

試合はメインイベントの蝶野の出場したタッグ戦が終わった。すると、蝶野がマイクを握った。

蝶野：「この新日本のリングの上には神がいる！！ミスター、イノキ！！」

すると、テーマ曲に乗って、猪木が登場してきた。

そして、猪木と蝶野がマイクを持って向き合うと、

蝶野：「猪木さん、俺はこのリングでプロレスがしたいんですよ！！」

猪木：「まあプロレスといってもいろいろな表現がある（と言いたげな事を言った後。）」

猪木：「お前はもうただのレスラーじゃないぞ。このプロレス界全体を引っ張っていく器量になれよ。」

と、蝶野はプロレスをやりたいが、猪木は現場責任者等を含むまとめ役の様な役割に回れ、と、話をすり替えてしまった。

蝶野：藤波（辰爾）、長州ここは俺に任せろ！！

と言ったが、猪木はこの時点では、新日本のオーナーだから、介入してくる事になる。

こうして、蝶野は現場責任者でフロント業を兼任する為、新日本本隊とも合流していく事になる。

蝶野は自分の試合がちゃんとした形で組まれているのであれば、猪木の介入は仕方がない。と考えたようであった。

そして、早くも蝶野プロデュースのCMで、蝶野が猪木に電話して、

猪木：蝶野、遠慮なんかするな！やりたいようにやれよ！

蝶野：やりたいように、やらせてもらうよ。

という作品を公開した。

ただ、まだ、TEAM-2000はかろうじて続いていた。1999年にAKIRAと共に作ったTEAM-2000は増殖していたが、2002年8月を持って、自然消滅という形になった。この頃から、高山善廣や鈴木みのる、天龍源一郎、藤田和之、佐々木健介、ボブ・サップや、魔界倶楽部というユニットが外敵軍としてやってくる。その後、蝶野は相変わらずの反体制派組織、BLACK NEW JAPAN。というユニットを作る。

しかし、話は少し戻るが、猪木の指令を受けての蝶野の初仕事は、2002年5月2日、新日本、東京ドームのダブルメインイベント。の夢の対決。蝶野対三沢戦であった。

その後、女性の故、ジョーニー・ローラー戦や、小橋建太戦、ハルク・ホーガン戦等を自分の人脈を生かして実現させていく。

今は、「プロレス休業宣言」をして、テレビを含め、様々な活動をしている。

チーズバーガー (おまけ)

2017年、1月4日の新日本の東京ドームのリングに、最近ではもうお馴染みになった、ROH 所属の黒人の細い身体でリングネームが「チーズバーガー」というレスラーがいる。この年は、ニュー・ジャパン・ランボーのランブルマッチに登場すると、最後から2人目まで残ったが最後は落下させられて敗れた。

2017年、1月5日は後樂園ホールで TEAM-2000 が1回限りの（と何回も言われているが）復活を果たした。蝶野はいなかったが、天山、小島、ノートン、ヒロ斎藤、になんとチーズバーガーが何故か加わっている。という対決になった。

試合は、チーズバーガーは活躍したのかは知らないが、無事終えたようだ。天山、小島はまだ、レスラーとして動けるのはわかるが、ノートンやヒロ斎藤は年齢的にもプロレスをするのはかなり大変な気もするが、ノートンの超竜ボム（パワーボム）やヒロ斎藤のセントーン等は、本当に懐かしい。

『ワールドプロレスリング』の番組の最後で、蝶野がチーズバーガーの写真か映像を指差し、「こいつは誰だ!!」と言っていたのが印象的だ。

TEAM-2000の最終メンバーとして、チーズバーガーは認められるのかはわからないが、ウィキペディアでは既に、勝手に認められていた。

2018年も恐らく、必ず、せめて TEAM-2000 には入らなくても、ニュー・ジャパン・ランボーには出場するだろう。

2018年1月5日も、もうチャンスも減ってくるわけだから、TEAM-2000 にチーズバーガーを入れて戦って欲しい。蝶野は是非解説席で見て欲しい。

もしかしたら、チーズバーガーは、ROH のスクールでアシスタント（援助）をやっているという事だから、本当はめちゃくちゃ弱そうに見えて、レスリングを本気でやらせれば巧いかもしれない。

多分、ある意味、キャラ的にお客を楽しませるファイトができるから、その辺はプロフェッショナルなのだろう。

ただ、蝶野自身の話になるが、「俺のプロレスはリングにお笑いはいらない。」という事を言っているから、私も昔の TEAM-2000 を振り返ると、そこには、お笑いは存在しないようなプロレスだった。

蝶野でお笑いの試合？とまでは言わないがリングでしていたのは、田口隆裕が馳の様に、頭を抱えて腰をグルグル回すポーズをした時、仲間だった蝶野も腰をグルグル回すポーズを見た事がある位だ。それだけ、蝶野はリングを神聖な場所と考えているのだろう。

まあ、お笑いがあるプロレスも否定するわけではないし、私は WWE だって見ているわけだし。最近の WWE はお笑いはそんなに多くはないかもしれないが。

話は飛んだが、2018年は、チーズバーガーのニュー・ジャパン・ランボーの優勝はあるのか？そして、また TEAM-2000 の再結成でチーズバーガーも加えるのか？

おわりに

初めての人の事についての本作成だったが、終わってみれば、蝶野の著者の本はあまり使わなかった。

たくさん使ったのは、ウィキペディアとユーチューブと検索。そして、それをまとめた2ページだけ使ったノート、で完成した。

ウィキペディアの丸写しを除けば、書いたページ数は9ページ。そこに、目次、はじめに、おわりに、等がついている形だ。

この作品では、できるだけ、蝶野と、蝶野率いる TEAM-2000の事から離れないような話題で書くようにした。

1999年～2002年の約3年間だけを集約して、書こうと頑張った。

違う事をしたかったけれど、初めてしまうとやり切るまでは止まらないで頭の中から離れなかった。

どういう風には書き始めればいいのか？とか。年代は正しいか？とか。怪しい部分はたくさんあるが、できるだけちゃんと順番通りに書いたつもりだ。

コメントとかもないから、自分の記憶などでなんとか書くしかなかった。

今回の作品はユニットの TEAM-2000を書きたかったが、その上で当時の蝶野の試合も載せる形にもなっている。

大仁田戦、湊戦、武藤との抗争の数々、新日本本隊や CLUB G-EGGS との戦い等を書いた。

軍団の拡大についても書いた。

蝶野に言える事はやはり「人脈」の多さ、というものが挙げられると思う。

女性の人気もあるだろうが、特に男性ファンからの人気が多いと思う。

蝶野は今、プロレスを「休業宣言」している。もう復帰もない、という声も大きい。

久々に出て、大怪我をしてしまう可能性を考えたら、私はそうした方がいいと真剣に思ってしまう。

今回の作品で長い作品を書く自信がついたとか、そういうものはほとんどない。ただ、曖昧な所をごまかさずにちゃんと調べたりするべきだろう、とかそういう事は思った。

肝心の蝶野の TEAM-2000の時期を書いてしまったから、また、蝶野の作品を書くのはなかなか難しいと思う。

だが、このストーリーもあえて、TEAM-2000がまだかろうじて繋がっていた頃の、三沢戦を書かなかった。本文にも書いたが、ローラー戦、小橋戦、ホーガン戦。その他、G1の高山戦、藤田戦、(蝶野)対ブロック・レスナー対藤田戦・・・等、有名どころの試合をほとんど書いていない。だから、違う機会でもた蝶野の事を書けるかもしれない。

とにかく、今は休みたい。そして、また本を書くのか、本は大変だからやめるのかはわからない。書き始めるともう完全に疲れてしまう。読んでくださりありがとうございます。(終)